

基本研修クロスセッションの効果について

－求められる教員の資質能力の向上を目指して－

研修部キャリア形成研修チーム

赤澤達郎 中田政晴 牧野浩之

基本研修にクロスセッション^{*1}が導入され3年目となる。昨年度は8月と11月に初任者と10経年者、2月に5経年者と10経年者を対象として合計3回、クロスセッションを実施した。若手教員研修^{*2}が導入され2年目となる今年度は、2月のクロスセッションにおいて2年目教員、5経年者と10経年者の3世代が参加することになる。これまでのクロスセッションを振り返ると、いずれも参加者の満足度は高く、クロスセッションの目指すところが満たされたり、福井型18年教育を意識することの大切さに気付いたりするなど成果をあげている。今年度は、教員に求められるいくつかの資質能力について、自己評価させるなどしてクロスセッションの効果等を測り、今後の充実につなげたいと考えている。

(^{*1} クロスセッション：校種や経験年数を越えた小グループを編成し実践や考え方を討議する場)

(^{*2} 若手教員研修：初任者研修、2年目研修、3年目研修 平成25年度から実施)

〈キーワード〉 教員の資質能力、学び続ける教員の確立

I 主題設定の理由

クロスセッションが導入されて、昨年度までに計4回実施してきた。これまでに実施したクロスセッションのアンケート結果によると、いずれにおいても満足度の高いものであった。また実施後の感想(自由記述)から「指導力の向上」「職務に対する意欲の向上」「コミュニケーション能力の向上」「メンタルヘルス」に役立っていることがわかった。さらに、異校種の状況を知ることで福井型18年教育への意識を高めたり、10経年者がミドルリーダーとしての自覚をより高めたりすることにもつながっていることが明らかになってきた。しかし、自由記述だけでは個々によって視点がバラバラであり、その視点も限定的なものである。クロスセッションの効果を測るためには、様々な視点で自分を振り返る必要がある。

そこで教員に求められる資質能力の4項目(豊かな人間性、高い専門性、マネジメント、変化への対応)について共通のアンケートを実施することにより、その効果に焦点を絞って検証し、次年度以降の研修の改善に活かしていきたいと考えて、このような主題を設定した。

II 研究の目標

クロスセッションは、校種・教科・経験年数の異なるメンバーで小グループを作り、グループ討議を通して、互いの実践から学び合い、刺激し合うことで、指導力の向上を図るとともに、職務に対する意欲やコミュニケーション能力の向上を図ることを目指している。クロスセッションの効果をより明確に把握するために各年代に共通したアンケートを実施し、その結果をもとに今後の研修のあり方を探る。

III 研究の方法

福井県では基本研修において教員に求められる共通の資質能力を「豊かな人間性」「高い専門性(教科指導、生徒指導・進路指導等)」「マネジメント」「変化への対応」の4項目とし、それぞれの項目ごとに研修内容を設定している。特に10年経験者研修においてはこれらの項目に従い研修の前後に自己評

価をすると共に、各自の苦手分野を補い、指導力や力量の向上を図る研修を計画・実施するようにしている。クロスセッションの効果を測るためには、共通した観点、視点が必要になってくる。そこで、10年経験者研修で実施している自己評価表をもとにアンケートを作成し、そのアンケートを11月のクロスセッション終了後に初任者と10経年者を実施した。その結果を集計分析し、そこで明らかになった課題を次年度の研修に活かしていく。また、2年目、5経年者においては2月に行われるクロスセッション終了後に実施し、集計分析する。

IV 研究の内容

1 クロスセッションの実施内容について

初任者と10経年者は8月と11月、2年目と5経年者、10経年者は2月にクロスセッションを実施する。下表はそれぞれの主な内容である。

表1 クロスセッションの概要

実施月 テーマ	対象者と準備物(レポート)	ファシリテータ役と協議内容
8月実施 10年後に目指す 教員像* ³	○対象者 初任者 レポートテーマ 10年後に目指す教員像 ○対象者 10経年者 レポートテーマ 10年間の振り返り	ファシリテータ役：10経年者 初任者が作成した「10年後に目指す教員像」について、10経年者が10年間の振り返りによる自身の体験等も踏まえてアドバイスする。また語り合いを通して、それぞれの将来の目標を明確にもつ時間とする。10経年者には若手を育てる意識の醸成を図る。
11月実施 事例研究* ⁴	○対象者 初任者 レポートテーマ 授業実践記録 ○対象者 10経年者 レポートテーマ 学校の教育活動や校務分掌における自己の取組	ファシリテータ役：教育研究所員等 「授業実践記録」について、10経年者の経験からのアドバイスの他、校種間連携を意識して他校種の視点も踏まえた時間になることを期待する。「学校の教育活動や校務分掌における自己の取り組み」では、10経年者が具体的な問題事例を提示し、その解決法を初任者とともに考察・議論する時間とする。あらかじめ答えが用意されているものではなく、話し合いを深める中で答えを紡ぎ出していくもので、かなりの技量を要する。
2月実施 授業実践	○対象者 2年目 レポートテーマ 授業実践記録 ○対象者 5経年者 レポートテーマ 授業実践記録 ○対象者 10経年者 レポートテーマ 学校の教育活動や校務分掌における自己の取組	ファシリテータ役：10経年者 2年目、5年経年者の「授業実践記録」について、10経年者は経験からアドバイスをするだけでなく、自己の実践の成果や課題も明らかにしながら、授業改善を図っていくための意識を高める。「学校の教育活動や校務分掌における自己の取り組み」では、自己の実践の記録化や、他との交流を図るために実践内容を再構築していく過程により、実践・振り返り・改善のサイクルを身に付け、学び続ける教員の育成を目指す。

(※3 初任者は3月に実施した内定者研修で授業名人との討論後に目指す教員像を考えた。その後、初任研の5月の宿泊研修で初任者同士で目指す教員像について討議。それを踏まえてふまえてクロスセッションに参加する。)

(※4 初任者は5月宿泊研修において各自の授業実践研究の目標を明確化した。8月の宿泊研修時の初任者と授業名人による協議を経て、11月に実践報告する。授業実践を含む教育実践研究は2年目、3年目研修、5年経験者研修、10年経験者研修と続く基本研修の柱であり、学び続ける教員の育成を目指している。)

2 アンケートの内容と実施結果

アンケートは10年経験者研修で実施されてきた「該当教員自己評価表」をもとに作成した。その内容は大変細かく設定されているので、内容を精選し、作成した。下はアンケート内容とその結果(11月のクロスセッション終了時に実施し、クロスセッションに参加して意識が変わったり、身についたりしたと思う点について調査した)である。

表2成長をはかろう！[クロスセッション自己評価表]アンケート項目

評価項目	評価する事項	初任者	10年経験者	
豊かな人間性	① (教職全般) 教員としての使命感、高い倫理観や幅広い視野、教養を身に付けていますか。	58%	46%	
	② (教職全般) 本県や勤務校の教育の現状と課題について理解していますか。	55%	36%	
	③ (人権教育) 人権問題について正しく理解するとともに、確かな人権感覚を身につけていますか。	32%	22%	
高い専門性	教科指導	④ (計画) 全員参加の授業づくりに努め、個別指導やグループ別指導など個に応じた指導方法を工夫していますか。	79%	59%
		⑤ (授業) 内容に応じ、体験的な学習や問題解決的な学習を重視するとともに、児童生徒の興味・関心を生かし、自主的・自発的な学習が促されるように工夫していますか。	70%	44%
		⑥ (ICT活用) 補助教材、視聴覚機材やICT機器など教材・教具を適切に活用し、授業方法を工夫していますか。	61%	48%
		⑦ (学級・児童生徒把握) 学級全体や個々の児童生徒の理解度を把握し、修正や改善を行っていますか。	67%	56%
		⑧ (評価) 評価を工夫し、指導の改善や学習意欲の向上に生かすようにしていますか。	32%	19%
		⑨ (言語活動) 言語に対する理解や関心を深め、言語環境を整えることを通して、児童生徒の言語活動が適切に行われるように配慮していますか。	50%	30%
		⑩ (家庭学習) 家庭学習など児童・生徒の自主的な学習態度の育成に取り組んでいますか。	28%	16%
	生徒指導・進路指導	⑪ (進路指導) 児童・生徒が自己の在り方や生き方を考え、主体的に進路を選択できるように指導していますか。	21%	27%
		⑫ (生徒指導) 生徒指導について十分に理解し、指導の充実に向けた考え方を明確にしていますか。	44%	46%
		⑬ (生徒指導) 教育相談の手法を理解し、教師と児童・生徒の信頼関係および、児童生徒相互の好ましい人間関係づくりを適切に進めていますか。	65%	55%
		⑭ (生徒指導) 気になる生徒や軽度の発達障害などを把握し、障害のある児童生徒の教育ニーズを把握していますか。	56%	50%
	マネジメント	⑮ (組織マネジメント・協働) 組織の役割を理解し、組織の一員として他の教員と連携協力すると共に、報告・連絡・相談を適切に行っていますか。	76%	53%
		⑯ (自己マネジメント) 個人の役割を理解し、自己マネジメント能力を身につけていますか。	42%	30%
	変化への対応	⑰ (今日的課題) 校種間連携など今日的課題に対して、積極的に取り組んでいますか。	28%	38%
⑱ (危機管理) 普段から児童や生徒の安全に配慮し、事故や問題に適切に対応し、個人情報保護などを意識していますか。		60%	36%	
⑲ (家庭・地域・関係機関との連携) 家庭や地域、学校外の関連機関との連携・協力が適切に行われていますか。		46%	39%	
⑳ (社会の動向への対応) 社会の動きに対応して、指導に新たな工夫・改善を取り入れていますか。		37%	20%	

3 アンケート結果の分析

アンケート結果を見ると初任者の方が10経年者よりもポイントが高い項目が多い。初任者の方が様々な面で学びが大きかったと感じていることが分かる。それは初任者の自由記述の中からも伺える。

自由記述より

- ・10経年者の先生の部活指導の実践は、私自身も今同じような状況で悩んでいたもので、解決の糸口が見つかったように思いました。「テクニカルコーチ」と「メンタルコーチ」のバランスを考えて実践していきたいです。
- ・10経年者の先生は、具体的な目標を提示することで、児童が見通しを持って行動をしていることや、教師が現状と課題をしっかりと理解することで、去年より今年、今年より来年と良くなるよう工夫して取り組んでいることが分かりました。
- ・10経年者の先生の実践発表では、不登校や情報モラル指導、生徒会での実践や指導などについてお話され、今後の自分の実践に大変参考になりました。特に印象に残っていることは「待つ」という姿勢の大切さについてです。つい待てずに口を出したくなる場面が多くありますが、生徒の自ら考える力を奪っていないか反省させられました。

10経年者が先を見通したり広い視野で物事を捉えたりすることは、それまでの経験で培われてきたことである。それらの経験をもとにしたアドバイス等は、初任者にとって参考になるものであることが分かる。反対に10経年者が初任者に比べて低い項目が多いのは次のことが考えられる。

- ① 10経年者のレポートの課題は「学校の教育活動や校務分掌における自己の取り組み」である。その内容を見ると、10経年としてテーマを設定し実践しているものや初任者のときから今日に至る中での実践をまとめたものなど様々である。学びを深めるには明確な研究テーマと実践について省察が必要であるが、それが不十分だったのではないか。
- ② 今年度は若手教員研修となり2年目であり、8月と11月は初任者と10経年者だけのクロスセッションである。グループのメンバーは違っても10経年者の話す内容が8月と11月で似たようなものとなり、学びが少なかったと感じたのではないか。ただし、このことについては、27年度は11月に3年目もメンバーに入ることを考えると解消できるのではないだろうか。
- ③ 10経年者はそれまでの経験から、教育活動に対して確固たる信念を持っている時期である。しかし、それがややもすると自身の学びの妨げにもなる。初任者からも学ぶという謙虚な姿勢が必要であるが、その意識が低かったのかもしれない。

(1) ポイントの高かった項目

項目別に比較すると、ポイントが高い項目は次のとおりである。

<初任者、10経年者ともにポイントが高い項目（ポイントの高い順）>

（数値は初任者、10経年者の順）

- ④（計画）全員参加の授業づくりに努め、個別指導やグループ別指導など個に応じた指導方法を工夫していますか。 (79%、59%)
- ⑮（組織マネジメント・協働）組織の役割を理解し、組織の一員として他の教員と連携協力すると共に、報告・連絡・相談を適切に行っていますか。 (76%、53%)
- ⑦（学級・児童生徒把握）学級全体や個々の児童・生徒の理解度を把握し、修正や改善を行っていますか。 (67%、56%)

- ⑬（生徒指導）教育相談の手法を理解し、教師と児童・生徒の信頼関係および、児童生徒相互の好ましい人間関係づくりを適切に進めていますか。（65%、55%）
- ⑥（ICT活用）補助教材、視聴覚教材やICT機器など教材・教具を適切に活用し、授業方法を工夫していますか。（61%、48%）
- <初任者のポイントが高い項目>
- ⑤（授業）内容に応じ、体験的な学習や問題解決的な学習を重視するとともに、児童生徒の興味・関心を生かし、自主的・自発的な学習が促されるように工夫していますか。（70%）
- <10経年者のポイントが高い項目>
- ①（教職全般）教員としての使命感、高い倫理観や幅広い視野、教養を身に付けていますか。（46%）

結果を見ると、ポイントの高い項目は評価項目の「豊かな人間性」「高い専門性」「マネジメント」の3項目から挙がっている。これは10経年者に出している課題「学校の教育活動や校務分掌における自己の取組」による討議を行っていることを考えると当然のことかもしれない。授業だけにとどまらず、教育活動全般についてグループ討議が行われていることの現れであろう。

④、⑦、⑥については初任研の課題が授業実践レポートであり、討議の中心となる内容である。そのため、討議の中での学びが大きかったのではないかと考えられる。ICT活用については、今年度、初任者研修においてICT活用を喫緊課題への対応として取り上げている。また、初任者の中にはICT活用を研究テーマに盛り込んで設定している者もいる。10経年者においては研修の一つに「ICT活用による授業研究会」を研修の一つとして設定している。これらのことから普段の授業や研修と直結しており、受講者の意識も高く、ポイントも高くなっているものと考えられる。

⑤においても、教育活動の中で協働することや報告・連絡・相談の大切さを研修の中で話してきた。それが活かされているのであろう。

⑬は10経年者のレポートと大きく関わる項目であり、初任者の授業実践とも切り離せないものでありポイントが高い。

初任者においては⑤も高くなっている。初任者にとっては日々行われる授業が最優先である。日々児童生徒と向き合う中で、授業をどのように進め、学力の向上を図るかが切実な課題としてあるのではないだろうか。

10経年者でポイントが高い①は10年間の振り返り、初任者へのアドバイスなど、再度自分の実践をもとに今後の自分のあるべき姿を見いだすきっかけになっているのではないかと考える。学校の中核リーダーとして学校全体を見る視点や傾聴、コーチング等、その立ち振る舞いを改めて見直し、それを実践していこうという意欲の高まりであろう。

(2) ポイントの低かった項目

ポイントが低い項目は次のとおりである。

- <初任者、10経年者ともにポイントが低い項目（ポイントの低い順）>
- （数値は初任者、10経年者の順）
- ⑩（家庭学習）家庭学習など児童・生徒の自主的な学習態度の育成に取り組んでいますか。（28%、16%）
- ⑪（進路指導）児童・生徒が自己の在り方や生き方を考え、主体的に進路を選択できるように指導していますか。（21%、27%）
- ⑧（評価）評価を工夫し、指導の改善や学習意欲の向上に生かすようにしていますか。（32%、19%）

- ③（人権教育）人権教育について正しく理解するとともに、確かな人権感覚を身につけていますか。
 (32%、22%)
- <初任者のポイントが低い項目>
- ⑰（今日的課題）校種間連携など今日的課題に対して、積極的に取り組んでいますか。 (28%)
- <10経年者のポイントが低い項目>
- ⑳（社会の動向への対応）社会の動きに対応して、指導に新たな工夫・改善を取り入れていますか。
 (20%)

これらの項目は、グループ討議の中で話題として出てくる割合が低いものかもしれない。初任者は普段の授業実践を課題とし、授業の振り返りを主な内容としてレポートを作成している。⑩のポイントが低いのは、普段の授業と家庭学習との関わりが見い出されていないのではないだろうか。授業実践の中に現れる児童生徒の言動は、その背後にあるその児童生徒の考えや思い、経験など様々なこととつながりがある。それは学校生活だけでなく、家庭生活とも関わるものである。そのような視点を初任者研修（主に宿泊研修で行われている授業づくり）に取り入れることも考える必要がある。初任者のレポートの内容に児童生徒の自主的な学習態度の育成という観点を設けたり、初任者研修や10年経験者研修の中にアクティブ・ラーニングの視点を喫緊課題への対応として盛り込むことで充実を図ることも考えていきたい。

⑪の進路指導の項目については、初任者は卒業後の進路指導までの展望が実感として見い出せていないため、低いのではないだろうか。この項目はキャリア教育の視点が必要である。子どもたちに現在の学校での学習と自分の将来との関連を意識させたり、将来自分たちが出て行く現実の社会を実体験させたりすることがキャリア教育に求められる。教科指導、学級経営、生徒指導など全ての教育活動においてキャリア教育の視点を持てるように、研修の中で意識付けを図っていきたい。

⑧の評価については初任者研修のレポート内容や基本研修の四つの柱の一つである「教育実践研究」にも関わりがあり、改善していかなければならない内容である。学び続ける教員を育むには、「実践」－「実践の省察」－「記録化」－「他者の実践との交流」をしっかりと行っていく必要がある。このサイクルはクロスセッションの中だけで確立されるものではなく、日々の実践において意識的に行われなければならない。そのためにも年度初めの研修だけでなく、様々な研修場面において受講者への意識付けを図る必要がある。

③については学級経営、授業、生徒指導など教育活動全体を通じて育成していくべき内容である。実践を語る中で、児童生徒の言動をどう解釈し、対応したのかを明らかにすることで人権感覚を研ぎ澄ましていく必要がある。この項目については基本研修全体を通じて取り上げていくべきである。

⑰は初任者が授業実践を進める上で、「次の授業をどうするか」「明日の授業をどうするか」という目の前の授業をどうするかが大きな課題であることが伺える。アンケートの中に「同校種のグループ討議をしてほしい」という要望を記述している初任者もいることから、異校種間連携というよりも同校種という意識があるのではないだろうか。これは、校種ごとに集まる研修の中でお互いの情報交換という時間を確保することも考える必要がある。

⑳は10経年者においてポイントが低かったが、10経年者になると授業の進め方や生徒指導など自分のスタイルが確立されていることであろう。ややもすると前年度踏襲ということも考えられる。個々に応じた指導が求められる今日、学び続ける教員として成長していくためにも10経年者への意識付けが必要である。

(3) 10経年者の方が初任者よりもポイントの高かった項目

さらにもう一つの視点として10経年者の方が初任者よりもポイントが高かった項目を示す。

- ⑪（進路指導）児童・生徒が自己の在り方や生き方を考え、主体的に進路を選択できるように指導していますか。
（10経年者 [27%]、初任者[21%]）
- ⑫（生徒指導）生徒指導について十分に理解し、指導の充実に向けた考え方を明確にしていますか。
（10経年者 [46%]、初任者[44%]）
- ⑬（今日的課題）校種間連携など今日的課題に対して、積極的に取り組んでいますか。
（10経年者 [38%]、初任者[28%]）

これらの項目は10経年レポートの課題「学校の教育活動や校務分掌における自己の取組（具体的な問題事例への対応）」をもとにクロスセッションを行っているため、自己の取組を振り返り、校種の違い、教科の枠を越えて傾聴と語りを行うことで、深まりを感じたと考えられる。特に⑬の項目は10年経験者研修の中に異校種の授業参観が選択研修の一つとして含まれていることもあり高かったのではないかと考えられる。

(4) 初任者と10経年者のポイントの高い順

アンケート中の評価項目（豊かな人間性、教科指導、生徒指導・進路指導、マネジメント、変化への対応）についてそれぞれの経験年数においてポイントの高い順に並べたものが次の表である。

順	初任者	10経年者
1	マネジメント	生徒指導・進路指導
2	教科指導	マネジメント
3	豊かな人間性	教科指導
4	生徒指導・進路指導	豊かな人間性
5	変化への対応	変化への対応

10経年者はレポートと重なっている部分が多いということで妥当な結果であろう。初任者の方は、課題レポートが授業実践記録にもかかわらず教科指導よりもマネジメントのポイントが高くなっている。アンケートの自由記述（下表）からも分かるように、今後の自分の成長、学校の組織の一員としてどのように役割を果たさなければならないのかを考えるきっかけとなり、ポイントが高かったのではないだろうか。

自由記述より

- ・1年目なので校務分掌などの業務の負担を軽くしていただいているので、学級や授業のことに集中できています。しかし、年数が過ぎるにつれて、校内の中の仕事も多くなり、学級や授業の準備に十分に時間をかけていられないときも増えてくると思います。そうなっても、仕事のバランスを考えて子どもたちに向っていかなければならないと思いました。
- ・今後の自分自身の課題として、周囲の先生方やPTA、地域の方たちを巻き込んでいけるようにしたいです。そのためには、校内、校外の方々と自ら積極的に関わっていきたいです。
- ・「20～30代は、職場の活気となる」という言葉が印象的でした。私は「教えていただく存在だ」という考えに凝り固まりすぎていたように思います。自分からも発信していくことの大切さを感じました。
- ・10経年の先生からは、校務分掌などで学校全体を運営していく立場で取り組んできたこと、気を付けてきたことなどを聞くことができました。自分が同じ立場になったときに必要な力はどんな力か

知ることができ、そのために今から力を蓄えていきたいと思えます。

V 研究のまとめ

1 成果

今年度、共通のアンケートを実施したことで、クロスセッションの効果について明確になったと考える。結果からも分かるように項目ごとにポイントのばらつきはあるが、教員に求められる資質能力について、様々な視点で自己の成長を認識している。ポイントの高い項目は受講者が持ち寄るレポートと関係している内容であり、グループ討議において話題として出てきた内容である。

初任者は実践を語り、アドバイスを受けることで自分の考えをより明確にし、今後の改善点を見い出せたという点で成果があったと考えられる。また、授業だけでなく報告、連絡、相談の大切さや危機管理など様々な視点において研修の効果があったことが分かる。

10経年者も様々な項目で効果があった。特に中堅教員として若手教員を育てるという意識の芽生えも見えた。また、10経年者の中に「人にアドバイスすることで、自らの実践の課題も見えてきた。」とあるようにアドバイスしながら、10経年者の学びにつながっていることが分かる。

2 課題

課題として挙げられるのが、初任者、10経年者ともに低かった項目である。それらの項目についてはクロスセッション以外の研修で実施したり、クロスセッションの中でファシリテータとして入る所員が視点の一つとして取り上げることも考えられる。

また、10経年者のレポート課題の設定の仕方である。10年経験者研修のねらい（若手リーダーとしての自覚を高める、自分の苦手分野の力量を向上させる）を再確認させ、4月当初の自己評価と勤務校での管理職との面談をもとに、明確なテーマを持って研修に臨むことで10経年者の学びも深くなるのではないかと考える。

今回の調査は初任者と10経年者のみの結果である。来年度は全ての年代がそろうので、若手教員（初任者～3年目）、5経年者、10経年者のアンケート結果をもとにさらに考察し、次年度以降の研修に役立てたいと考えている。また、このアンケートを毎年実施し、個人の経年変化を調べ、研修者の成長を測り、基本研修全体を通した課題を明らかにする必要がある。

最後に、クロスセッションに参加してアドバイスをいただいた福井大学教職大学院、嶺南教育事務所、特別支援教育センター、学校教育政策課の皆様に、改めて感謝申し上げます。